

朝日小学生新聞／デジタル版（2025年5月27日）

水害犠牲者の大半が「逃げ遅れ」 危険区域の避難、タイミングは？

山村武彦



命を守る「避難開始スイッチ」

○大半が「逃げ遅れ」



2020年7月の豪雨(熊本県球磨村で筆者撮影)

ガスボンベが引っ掛かっていたのは地上約7メートルの電線でした。この写真は、「2020年7月豪雨」時の熊本県球磨村で写したものです。地元の人も「これほどの浸水は初めて」と言っていました。地球温暖化の影響なのか、最近雨の降り方が変わり、水害を起こすような大雨の回数が1980年代と比較して約2倍になっているのです。

水害犠牲者の大半が「逃げ遅れ」によるものです。「雨の中、避難所に行くのはおっくうだし、イザとなれば2階へ避難すればいい」と言っていた人が犠牲になった例もあります。

○母子3人、2階で犠牲

大雨のとき、メディアは「夜間や道路冠水時の避難は危険、2階以上の安全な場所に避難してください」と呼びかけます。しかし、地形や家の構造によっては2階が絶対安全とは限りません。

20年8月、長野県岡谷市に帰省中のお母さん(41)、中学1年の次男(12)、小学2年の三男(7)の3人が2階で犠牲になりました。裏山の崖と家の高さがほぼ同じで、就寝中に大量の土砂と濁流が、2階の窓を突き破り流れ込んだのです。昨年9月の奥能登豪雨では、近くの中小河川が氾濫し、家ごと流された女子中学生が犠牲になっています。痛ましい限りです。

ハザードマップを見て、自宅が土砂災害警戒区域、河川流域の家屋倒壊等氾濫想定区域、1メートル以上の浸水想定区域(以下「危険区域」)にあれば、洪水や土砂災害で家が浸水、流失、損壊のおそれがあります。明るいうちに避難所などへ「立退き避難」すべきです。

○いつ逃げる？

「避難指示(レベル4)が出たので外へ出ようとしたら、もう道路が川のようになっていて避難できなかった」という人や、危険区域なのに「うちは安全」とか「今まで避難しなくても大丈夫だったから」など、思い込みにとらわれて逃げ遅れた人もいます。

問題は危険区域における避難のタイミングです。自治体からの避難情報(5段階警戒レベル)や気象情報が目安です。高齢者等避難情報(レベル3)の発令、大雨警報・河川の氾濫警戒情報・土砂災害警戒情報の発表が「避難開始スイッチ」と思って、最悪に備え「明るいうちに、念のために避難する」ことを事前に家族で決めておきましょう。避難場所が遠ければ、近くの安全な親戚・知人宅に一時的に避難させてもらいます。

そのためにも大雨シーズン前の今、家族分の非常持ち出し袋を準備し、中身を点検しておきたいものです。

山村 武彦（やまむら たけひこ）

防災システム研究所所長。東京都出身。実践的防災・危機管理の第一人者。1964年、新潟 地震でのボランティア活動を契機に、研究所を設立。以来50年以上、世界中で発生する災害の現地調査を実施。報道番組での解説や講演、執筆活動などを通して防災意識の啓発に取り組む。企業や自治体の社外顧問やアドバイザーを歴任。防災・危機管理マニュアルの策定など、災害に強い街づくりに携わる。座右の銘は「真実と教訓は、現場にあり」。